

季能古博物館だより



左から 右側面 正面 断面 (江口昌之氏 寄贈)

地質博物館・能古島(6)

能古会会員 小川 誠

象の来た道

平成九年初夏、江口昌之さん(能古島在住)があまり貝を掘っていた時、西の小磯(能古島南西海岸)で動物の牙らしいものを見つけた。今は「博物館」に保管されているが、これが実は象の牙だったのである。

象の骨格の中で、化石として残り易いのは、象牙質の牙(犬歯)と臼歯であるが、この標本は牙の先端から一三、五cmで切損し、径五、五cmの断面には細かい年輪が見られる。また、右側面には中心に達する亀裂一条がある。なお、海底にあったためか全体が淡桃色で石灰質の鱗片状沈殿物に覆われており、通常見られる象牙の感はない。

標本は断片的であるため、学術的には、ただ「長鼻目象科?で、種・属不明」としか記載されないが、ナウマン象の可能性が大である(鹿児島大学 大塚裕之教授談)。

ナウマン象の化石はこれまで日本各地で多数発見されており、最近では唐津湾の沖合で象の臼歯が採集され、山陰や瀬戸内海でも臼歯や牙が漁師の網に掛かることが多い。なお、陸上では段丘堆積物中での発掘が多いことはご存じのとおりである。

何故、能古島に象の化石が、との疑問を抱く人が多いと思うが、ここは昔、象が来た道であり、何処からと言えば、勿論、朝鮮半島に続く大陸からである。

日本列島はかつてユーラシア大陸の縁辺部にあつたが、一千五百万年前頃に大陸の一部が引き裂かれて分離し、日本海が生成した。そして日本海に通じる四つの海峡(朝鮮・津軽・宗谷・間宮)によって分断され、今見る日本列島の配置が次第に形成されて行く。

そうした中、百万年前頃から地球上には氷河期が訪れ、日本でも四回の氷河期を迎えた。最後のウルム氷河期の最寒期に当たる二、三百万年前には、海水が氷結した結果、海面が現在より一〇〇m〜一三〇mも低下し、日本列島を分断していた海峡が陸化して地続きになり、いわゆる陸橋が出来たのである。

すなわち、今、ここにある象の牙は、ナウマン象の一群が新天地を目指して朝鮮海峡の陸橋を渡り、遙々日本に来る途中に志半ばで倒れた象たちの中の一頭なのであろう。

彼の目に映った能古島(山?)は如何なる姿であつたろうか。
(次号に続く)

亀井家学を支えた女たち(7)

少葉(昭陽長女友) 中の下

福岡地方史研究会々員 早船正夫

◆聴因以来の儒医兼帯

少葉の夫源吾(後に雷首と号す)が儒医兼帯、即ち儒学者と医学者を兼ねたのは、実は亀井家で雷首が始めてではない。曾祖父聴因以来の祖伝である。

聴因は、伊都郡井原から医家の志を立て、福岡藩医の鷹取氏に奉公し、医事見習いを重ね、姪浜浦に出て医業を営んだ。その傍ら儒学の習得に勉勵、学者の来訪・文信に努めた。



今熊野観音寺「醫聖堂」

聴因の子南冥は、儒学に於ける古文辞学(荻生徂徠学)を学ぶとともに「古医方」(古方派)で傑出した大坂の永富独嘯庵に師事した。「古医方」とは近世漢方医学の二大流派の一つで、「後世派」に相對するものであった。「後世派」は「金元医学」に拠るもので、「金元医学」は「程朱医学」とも言われ、朱子学的性理の学陰陽五行説が多分に加味されており、抽象論的色彩が濃かった。

「古医方」は経験・実証主義であり、名古屋玄医を以て興り後藤良山を経て香川修庵、山脇東洋、吉益東洞、永富独嘯庵に至る。「古医方」は儒学における朱子学を批判して、古学(荻生徂徠学)

が興ったのとよく似ている。したがって古学と「古医方」を併せ修める人も多く亀井南冥もその一人である。

◆京都「醫聖堂」に合祀された南冥

京の御寺泉涌寺山内、今熊野観音寺(西国第十五番札所)に「醫聖堂」という一郭がある。

これは昭和五十九年、当時の日本医師会会長武見太郎氏らの「日本医学の発達の貢献に大なる医家先哲を祭祀することによって、医道の高揚をはかる」という発意によって、建立された。ここには、奈良・平安より幕末までの医家先哲百二十二名が合祀されている。側に記念碑があり、医家の名が刻まれている。奈良時代の和氣廣世(清麿の姉)から始まり明治初頭の浅田宗伯まで。大半は江戸時代の人物で、蘭医学者も含まれている。山脇東洋、杉田玄白、華岡青洲、渋江抽斎、大槻玄沢、緒方洪庵等是一般にも知れ渡った有名な医者である。

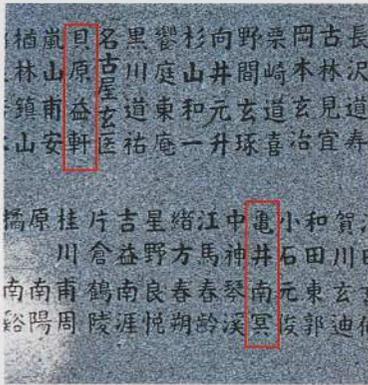
◆永富独嘯庵との師弟関係

永富独嘯庵こそ当代の実力有数

の医家であった。しかも南冥との師弟関係は尋常なものではない。独嘯庵は長州赤間関の人、各地の医者について遍歴するが、自分が懸命に取り組んだ「古医方」も既に墜落が始まっている、として失意のうちに故郷に帰っていた。しかし三十歳にして長崎遊学を思い立ち、これに同行したのが二十歳の南冥である。父聴因が独嘯庵の評判を聞き、息子の教育を依頼したものでらしい。二人はオランダ医学に触れ、得る所は実に大なるものがあつた。

独嘯庵は間もなく京都を経て大坂に出るが、南冥に書を以て弟子入りを要請した。独嘯庵は医事実務家を自任し弟子を取らなかつたが奉公してでもという者が続出し門第十名はいたと言う。その独嘯庵が敢えて南冥には弟子入りを勧めている。南冥の才能と人物を信頼していたからに他ならない。

後に南冥は独嘯庵の著書「漫遊雜記」の序文を乞われるままに書き、師の病没に際しては遺言に依りて、遺児充国(亀山)を引取り養育の後五島藩の藩儒に就けている。独嘯庵が将来を嘱望した門弟は三名。これを永富門の三傑と言つ。小石玄俊、小田亨叔と南冥。玄俊は京都にあつて名医大家の名を欲



記念碑 (拡大)



「醫聖堂」記念碑

しいままにし、独嘯庵の没後、師が望みながら果たせなかったオランダ医学の修得に励み「醫聖堂」にも合祀されている。小田亨叔は独嘯庵の実弟であるが、兄の意向に添って郷里の長府藩の儒医に仕官した。

南冥は医学においても当時一流、ハイレベルな位置で活躍しており、後世「醫聖堂」に合祀される理由はそれなりに保持していたのである。

(注)

日本医史学会関西支部一九九五年(平成七年)春季大会に於いて次の演題で講演が行われた。

日時 五月二十八日(日)
場所 京大館
演題 二百三十回追善祭と独嘯庵を廻る

演者 岡村芳樹(大阪上本町・岡村クリニックス院長)

※京都の医史学全般について半井英江氏(医療文化史サロン協賛会・運営委員長)の御教授を受けた。篤く御礼申し上げる。

◆ 儒医兼帯医家の重み

それにしても何故わが国では儒医兼帯が医学界で普及したのであろうか。勿論儒学者でなくとも医者にはできた。医師の資格制度のない時代である。葉箱持ち等見よう見まねで医技術の修得が可能な時代であった。

理由の一つは、医学書の殆どが中国伝来の漢籍であったことである。「傷寒論」「神農本草經」等々。これを読みこなす学力は儒学の読解力と共通するものがあり、このことは次に勃興する蘭方医学におけるオランダ語の読解力が必須であったこととよく似ている。漢学

の厳密な分析力の素養は漢医書の理解に充分発揮でき、現実の病患に当てはめる場合の応用力も漢学のよくする所であった。

もう一つは、儒学を学ぶ人の一般教養の高さと信頼への期待の大きさである。特に儒学の「仁」を具体的に体現する言葉として、「医は仁術なり」という語があり、患者に期待を持たせやすい。このことはキリスト教伝導師の医師が、医を受ける側の人々に無限の信頼感をもたらしたとよく似ている。

ともあれ儒医兼帯の医家は一般的に世間の尊敬を受け見よう見まねで開業した者と世評は異なっていた。医家が子孫に存続する確率も儒医兼帯の方が高かった。

現在、例えば何何堂とかの古い医家名をもった有名大病院は少なくない。これは昔の儒医兼帯の伝統を有するものの後裔に他ならない。

◆ 南冥は医よりも学を選んだ

南冥は医の道で進むことは充分可能であったにもかかわらず学問の世界にひた進みに進んだ。

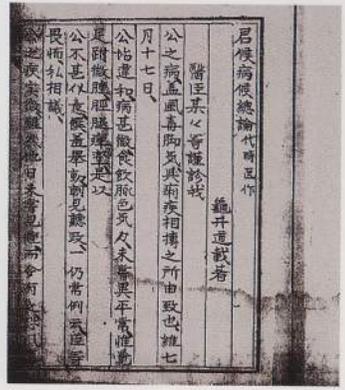
一介の町医から拔擢されて儒医兼帯として十五人扶持を与えられている。当時の身分制度では藩儒として代々竹田家以下十二家が敵

然としており、南冥の学力をもってしても表面では医者としてしか扱われなかった。儒学者としては医学との兼務でしか生きるすべがなかったのである。

しかし間もなく儒学の実力は認められ、藩主侍講として殿様の近くで講義をするようになり、更に五年後の天明三(一七八三)年福岡藩西学問所の主宰を命ぜられる。

◆ それでも亀井の医局は診療を続けていた

このような華やかな学問活動の傍ら内々で医事を続けていた。永年の患者で診療を乞う者もあり代診だけでは済まぬこともあった。南冥二十八歳、鹿児島への旅路では、折々の宿泊先で診察を乞う者が多く、旅立ちを一・二日延期したとの記事が散見される。南冥の医療技術は当時としては相当なものとして衆目認めていたのであろう。藩の侍医としての勤務もあつたらしく、藩主治之公の病状カルテともいふべき「治之公君侯病候総論」なる文書が南冥の手で遺されている。これは医学史上貴重なものとされている。なぜなら大名な者の病状がこれ程詳しく伝わっているのは少ないからである。



『君侯病候総論』(福岡県立図書館 太田資料139)

◆昭陽は学問一筋。医事への願望強し

亀井家学は二代儒医兼帯であったが、三代目の昭陽は学問一筋を貫いた。しかも藩の城代組の平士の務めを兼ねながらである。つまりは身にしみるものがあつたであろう。「誰かを医家になりたい」との願望が次第に強くなる。特に南冥はその願望を強くもつていた。

昭陽の実子のうち長男は福岡藩の平士としての世祿を継がせた。しかも長男義一郎は幼く次男鉄次郎は生れたばかり。そこで長女友(少稜)に養子を迎え、これに儒医兼帯を託したいとの思惑が次第に強くなる…。

かくて源吾(後に雷首と号す)が亀井門下生より選ばれた。雷首は聴因の姉の孫にあたり幼児より亀井門の内弟子に加わっていた。



柏書房『日本近世女性生活史事典』

雷首が医事後継者に決まったのは文化四(一八〇七)年。昭陽が父の著書『論語語由』開板のため、江戸への旅に雷首は随行した。翌年帰着の後に南冥が昭陽に相談し、昭陽がこれに応じて雷首に言い渡したのもらしい。時に雷首十九歳。友(少稜)十歳。雷首の医事の師匠については明確ではないが、手近にいる南冥こそ先ず一流の師であろう。この時から南冥の逝去まで七年間、折にふれ指導を受け得たと思われる。時代も推移しオランダ医学への必要も感じ、その勉学も重ねたであろう。

雷首は少稜と結婚。診療も徐々に開始し、更に八年後には「今宿亀井家」を立ち上げることになる。かくして九年間の修業を経て、雷首は少稜と結婚。診療も徐々に開始し、更に八年後には「今宿亀井家」を立ち上げることになる。かくして九年間の修業を経て、雷首は少稜と結婚。診療も徐々に開始し、更に八年後には「今宿亀井家」を立ち上げることになる。

◆夫婦連携の儒医兼帯

本編は少稜のことを書くのが本筋であるが、すっかり廻り道をしてしまった。が、儒医兼帯を目指す亀井家学にとって少稜の役割の重みを理解して頂くために敢えてそうした。

南冥と昭陽の目指した儒医兼帯は、「儒の昭陽」と「医の雷首」の並存であった。当初の数年はそうである。しかし「今宿亀井家」の立ち上げ後は「医の雷首」「儒の少稜」の夫婦連携で儒医兼帯を充実させていくのである。

雷首の医業は極めて順調で、糸島から唐津・松浦ひいては五島にまで好評を博した。雷首は同時に儒学の修練も重ねている。只の医者ではない。しかし患者の増加に伴い、医業に埋没しそうになる「今宿亀井」の儒学を女ながら支えたのが少稜であった。(続く)

【参照】

- ・大塚恭男『東洋医学』岩波新書
- ・荒木見悟『亀井南冥・昭陽』明德出版社
- ・京都府医師会編『京都の医学史』思文閣出版
- ・井上 忠『福岡藩に於ける洋学の性格』(文献出版『九州の思想・文化』所収)

事務局だより

皆様にはいつも博物館の運営にご協力いただき有難うございます。当館は例年通り12月1日より2月末日迄、冬季休館となります。この間に資料の整理や調査、情報収集、ビデオ撮影から外回りの作業迄、ほとんどすべてを職員全員で行います。展示台のような大きなものから、名札のような小さなものまで、館で使用する小道具など、島で手に入るものすべてをふるに活用し制作。あとは職員の手とセンスがたよりです。

制作品数が増える程に職員は腕をあげていき、職人さんの様なこだわりをみせることもあります。どうしてもできない時は、島の人達に泣きつく・・・? 「あつ」というものを使って「えっ」という方法で出来上がり。自然とともに暮らしてゆくといいことは、創意工夫という素晴らしいものを返してくれるようです。一杯のコーヒーと職員的笑顔? だけで臨時職員に早変わりです。当博物館は冬の間この様な人々に支えられて春の開館準備をいたします。来春も御来館の程心よりお待ちしております。

第5回能古の風フォトコンクール 入賞者発表



グランプリ賞 「窓辺の光景」 高鷹 春一氏



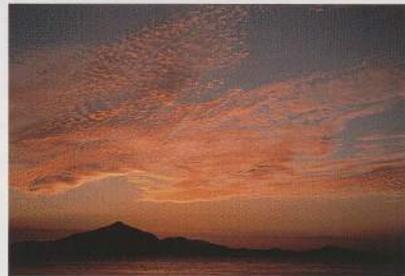
のしまでしよう
能古島賞 「局舎前」 大村 博文氏



準グランプリ賞 「夏の少女」 藤吉 マツエ氏

第5回能古の風フォトコンクール入賞者

グランプリ賞	三万円	高鷹 春一 様	福岡市早良区小田部
準グランプリ賞	三万円	藤吉 マツエ 様	福岡市中央区小笹
特別賞	二万円	斎田 英二 様	福岡市早良区西新
<small>のしまでしよう</small> 能古島賞	一万円	大村 博文 様	福岡市中央区小笹
入 選	一万円	床嶋瑠璃子 様	福岡市早良区南庄
入 選	一万円	西川 芳英 様	太宰府市梅香苑
入 選	一万円	丸尾 功 様	福岡市西区能古
入 選	一万円	柳 瀬 尚子 様	福岡市西区泉
入 選	一万円	八尋 祥文 様	福岡市西区姪の浜
入 選	一万円	山本 光玄 様	福岡市中央区大手門



特別賞 「初秋の色雲」 斎田 英二氏

今年も皆様のお力で「能古の風フォトコンクール」を無事開催させていただく事が出来ました。有難うございます。職員一同心より御礼申し上げます。11月30日迄、応募作品100点以上を別館に展示しております。いろいろな能古島どうぞ御覧下さい。気の早い話ですが来年も、ぜひ御応募の程よろしくお願い申し上げます。

能古博物館協賛会・友の会

〔法人協賛会員〕

- 浄土真宗本願寺派 浄満寺
(医)原土井病院
ワタキユーセイモア(株)
福岡メディカルリース
(株)オールアンドエム
(株)クリエティティブサービス
福岡板板郵便局 鬼鞍信孝
福岡能古郵便局 西方俊司
福岡赤坂郵便局 戸田正義
日清医療食品(株) 福岡支店
福岡経営管理センター
(株)サンコー
(医)恵光会原病院
(株)西日本銀行 和白支店
(株)西日本銀行 千代町支店
(株)西日本銀行 香椎支店
(株)西日本銀行 土井支店
(株)西日本銀行 新宮支店
(株)西日本銀行 箱崎支店
(株)西日本銀行 久山支店
(株)サンネット
(株)福砂屋
(株)昭和鉄工
(医)笠松会有吉病院
(株)センタービシネス
(有)エダ建築社

〔協賛会員〕

- (敬称略・順不同)
九州防災工業(株)
(有)西部レベーターサービス
(有)豊友設備
総合産業(有)
(株)ニッコトラスト
(株)メイデン
ダイアド(株)
木原敬吉
石橋 親一
坂田 貞治
庄野 直彦
原田 國雄
森光 英子
永井 功
緒方 益男
浦上 健
山本 稔
(株)橋本組
下山工業(株)
学校法人原学園
(協)唐人町ブラザー甘栗館
大和産業(株)福岡支店
社会福祉法 福岡ひまわりの里

〔友の会会員〕

- 立石 武泰
伊藤 茂
玉置 文枝
水田 和夫
木戸 龍一
岡部六弥太
星野万里子
吉村 雪江
安松 良一
高田 浩二
桑野 次男
藤木 充子
和田 宏子
行成 静子
片岡 洋一
山内重太郎
石川 文之
山内重太郎
都筑久馬
齋藤 拓
横山 智一
宮崎 集
西 政憲
岡本 金蔵
岡本 金子
星野 智子
林 十九楼
宮 徹男
宮 友儀
織田喜代治
上田 博
鶴田スミ子
塚本美和子
伊藤 康彦
寺岡 秀實
原田 種美
奥田 稔
石橋 清助
井上 敏枝
吉原 湖水
隈丸 清次
吉富とき代
浜野信一郎
大山 宇一
葉山 政志
川島 貞雄
岸 洋子
久芳 正隆
半田 耕典
武藤 瑞也
庄山 雅敏
吉田 洋一
永岡喜代太
神戸 純子
渡辺美津子
山田 博子
佐藤 泰弘
前田 静子
飯田 晃
神戸 聡
田里 朝男
吉田 一男
池田 修三
岩谷 正子
小川 正幸
榎藤 菊朗
井手俊一郎
増田 義哉
宮嶋熊太郎
土井 千草
松坂 洋昌
稲永 実
鹿毛 博通
松井 映子
古川 俊規
衛藤 博史
伊藤 泰輔
西村 達頭
執行 敏彦
渡辺千代子
後藤 和子
川山浦一郎
脇山由紀子
川田 啓治
川田 啓治
足達 輔治
中村ひろえ
古賀 謹二
野尻 敬子
大野 幸治
柳田 正己
青木良之助
神崎憲五郎
金子 柳水
佐野 栄
井手 親栄
宮崎 春夫
鬼丸 碧山
山崎元治
山崎 元治
古賀 義朗
西山 正昭
市丸喜一郎
豊島 嘉穂
庄野 陽一
守瀬 孝二
田中 祥子
甲本 達也
田本 政宏
濱北 哲郎
大塚 博久
辻本 雅史
杉浦 清
中野 晶子
大谷 英彦
野崎 逸郎
住本 尊子
村山 吉廣
山根ちず子
住本 直之
大島 節子
武田 正勝
岩淵 謙治
徳重 善弘
石橋 善弘
松本雄一郎
吉村 陽子
富永中加代
鈴木 智子
田中 加代
庄野 健次
木原 光男
森村 清朝
野見山 実
頃末 隆英
友原 静生
森口 智子
山見商会
山本 信行
岩屋和和整務所
尾澤 健
井上陽一
寿美電気
矢野 鈴子
藤崎 和子
宮崎 正直
原田 雄平
山本 勲

御寄付者芳名
西野ノブ子様
「ありがとうございました」

能古博物館ご案内
開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 12月1日~2月末日の冬季のみ休館
入館料 大人400円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819-0012 福岡市西区能古522-2
(092) 883-2887
FAX (092) 883-2881
ホームページ http://www.nokonet.com/museum
メールアドレス museum@nokonet.com

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を台簿にします。
財団法人 能古博物館
納入方法 郵便振替 017309060970
協賛会 (個人)年間1万円(何口でも可)
友の会 (法人)年間3万円(何口でも可)
(館)の活動、館誌購読と催事企画に参加
館維持、資料収集、施設整備等の
資金援助を受ける



※新規の御加入(先号以後、平成十四年九月三十日現在)を、記載いたしてありますので、何卒ご芳名をご確認ください。
ありがとうございます。
自然と文化の小天地創造